《修士論文要旨》

中学校地理教科書における台湾の扱いについて

中村祐介*

台湾は、現在、中華民国という国家であり、中華人民共和国とは別の国である、というのが実態である。しかし、日本人の多くは、「台湾は中華人民共和国の一部である」であると思っている。

こういった認識のずれはどのように起こるのか。その原因の中心が、中学校の地理教科書に原因があると考え、そこを中心に、まず第一章で、日本のメディアと日本人に見られる、台湾認識の間違いの根本原因は何かを確認する。第二章、第三章では、日本との違いを確認するために、第二章では、中華民国（台湾）で発行されている地図を検証し、第三章で、中華民国以外の外国で発行されている地図を検証した。

次に日本人の台湾認識に与えた影響を見るため第四章で、日本の中学校地理教科書と、地図帳を年代別に見て検証した。

第一章では、まず、NHKの報道、読売新聞の歴史教科書特集の記事を取り上げ、これらメディアの間違いの中に見られる、「台湾独立の意味」への勘違いを、問題にした。

そして多くの日本人が勘違いしている「台湾独立の意味」を中心に、台湾独立の意味は「中華人民共和国からの独立」ではなく、「現行の中華民国体制からの独立」であるということを、確認する。

第二章では、蒋介石時代の、ロシアの一部や、タミール高原の一部まで含んでしまう、「架空の中華民国の地図」から、一九八八年の民主化後の地図、最新の地図までを紹介し、民主化とともに、虚構ではない、現実の世界地図に徐々に、是正されていっていることを確認した。

第三章では、中華民国以外の外国で発行されている地図を見ることで、世界の主要国の多くは台湾と中華人民共和国を、区別した地図を使っていることが分かった。

第四章では、地理教科書と地図帳の検証の結果、昭和四十七年の「日中共同声明」によって昭和四十九年から、中華民国（台湾）の教科書への記述に制限が加えられたことが明らかとなった。

さらに、昭和五十七年に新たに文部省検定基準として設けられた「近隣諸国条項」の影響も垣間見られた。

まとめとして、まず、日本人の台湾認識の間違いはまず、地理教科書から来ているということが分かったため、隣国を隠すような教育の是正を求めた。さらに、日本の教科書、地図帳において、台湾を中華

平成16年度　*文学研究科文化財史料学専攻

民国（台湾）と、きちんと事実を記載しようとするには、相手の意見をただただ、聞いているだけではなく、我が国の立場を表明し、毅然とした態度をとる必要がある。軋轢も生まれるだろうが、それを乗り越えることによって、より成熟した関係になるのではないかと、考察した。